

狭衣物語解釈

(11)

本 田 義 彦

中将の御笛になりて、

帝「さていかに。仕う奉るまじきか。」

と、度々まめやかなる御気色にて責めさせ給へば、いとわびしう、「かうと知らましかば参らざらましものを」と、悔しけれど、のがるべき方なくて、笛も初々しげに取りなして、殊に人の聞き知らぬ調子一つばかり吹き鳴らし給へるを、上は、音おとには聞きつれど、いとかくまでは思し召さざりつるを、今まで耳馴らさざりける恨めしさを、引き返し仰せられて、めで驚かせ給ふさまいとこちたし。聞く限りの人々も、さらにこの世の物の音とも聞えぬに、涙もとどめ難けれど、なかなかなる程にて止みぬるを、

帝「いとあるまじきこと。」

と、責め宜はずれど、

狭「ただかばかりなむ大臣おとこの戯れに教へ侍りて、これよりほかにはすべて覚え候はず。」

と、奏し給ふを、

帝「いとうたて、虚言うそごをさへつきづきしくも言ふかな。大臣の笛の音に似るべくもあらざめり。すべてかく苦しと思はれば、さらに言はじ。」

と、仰せらるれば、いとわびしうて、皇太后宮の姫君たちなどの、上の御局におはしますころにて、「心にくき御あたりは何事も残りなく聞かれ奉らじ」と思ふ方さへいとどしきなるべし。

〔口 訳〕

狭衣中将のお笛の番になって、

帝「さて、どうだ。吹いて聞かせないつもりか。」

と、たびたびまじめなご様子でお責めになるので、たいそう困って、「もし前もってこうと知っていたら参内しなかつたでしょうに」と残念だけれど、のがれる方法もなく、笛も初心者らしくとりあつかって、わざと人の聞き知

らぬ調子一つだけ吹き鳴らしなされたのを、帝は噂には聞いていたが、ひどくこんなにまでうまいとは思っておられなかつたが、今まで耳になれるほどにも聞かなかつた恨めしさを、くりかえし仰せられて、ほめてはびっくりしていらつしやる様子は、ひどく仰々しいほどである。聞いているすべての人達も、全くこの世の物の音とも聞えないので、涙もとどめにくけれど、かえって聞かぬがましと思われれる程でおわたつたのを、

帝 「全くけしからぬ振舞。」

とおつしやつてお責めになるけれど、

狭 「たゞこれだけを父大臣が戯れに教えなされて、こ

れよりほかはすべて覚えていません。」

と申し上げなさるのを、

帝 「全くけしからん、嘘までもっともらしく言うこと

よ。大臣の笛の音には似ているとも思えないようだ。

すべてこのように笛を吹くことを苦しいとお思ひに

なるのなら、もう決して言いません。」

と仰せられるので、たいそう困ってしまったて、皇太后宮

の姫君達などが、上の御局にいらつしやるところで、「奥ゆ

かしい御方々に何事も残りなく聞かれ申すまい」と思う方

面までがなお一層つよつてきたのであらう。

〔注記〕

○初々しげに いかにもまだ持ち馴れないといった風に

初心者らしくわざと心許ない持ち方をして。

○引き返し 朝日の日本古典全書本の頭註には「過去に

溯って仰せられて」とあるが、「くりかえし」と訳しておいた。辞書類を見ると、一般に「前と変わって」の解しかないところから、それでは意味がわからないので「過去に溯って」の解となつたのであらう。しかし、新明解古語辞典には「前と変わって」のほか「くり返し」の解も設けて、源氏・宿木の「御文を……」見る給へり」の用例を挙げている。こゝも、この解に従うべきであらう。

○この世の物の音

「物の音」を音楽と限定してもよい

けれど、もっと広くこの世ではこんなよい音は聞かれな

いとみた方が面白くはあるまいか。

○なかなかなる程 もっと聞きたいのに、わずかばかり

で止めてしまったので、それならむしろ聞かない方がよい

いというのである。笛の音のすばらしさに対するほめこ

とば。

○いとあるまじきこと 「決してあつてはなるまいこと」

で、ここでは「もつてのはかの振舞」とか「全くけしからぬ振舞」とかの意となる。

○大臣 狭衣中將の父、堀川大臣のこと、嵯峨帝の兄。

○あらざめり 「ざるめり」が音韻変化で「ざんめり」

となり、当時「ん」を表記する文字がなかつたため、何

も書かないという、いわゆる零表記である。よつて読む

時は「ん」をいれて読むべきである。

○皇太后宮の姫君たち 皇太后宮は今上嵯峨帝の后。そ

の姫君たちは三人居られるが、女一宮は当時齋院なので、

今ここには居られないであろう。したがって、こゝに居られるのは女二宮と女三宮とであろう。女二宮は狭衣との間に若宮を産むことになるが、表面上は皇太后宮の子として扱われる。女二宮は狭衣に降嫁の予定であったがそれ以前のこと、皇太后宮は相手が狭衣であることをご存知なく、やむを待たず自分の子とされたのである。ここに「皇太后宮の姫君たち」を登場させ、「心にくき御あたり」に何事も残りなく聞かれ奉らじ」と狭衣に言わせたのは、後に女二宮と狭衣が交渉することになる、その状線ともいべきであろう。

なお、皇太后とは、一般には先帝の皇后で今上の母をさすのであるが、こゝでは今上の后をさしている。これは次のような歴史上の事実をふまえているのであろう。

後冷泉天皇治世の最後の年、治歴四年（一〇六八）に藤原教通女歎子が女御から皇后に上られたので、皇后寛子（頼通女）は中宮に、中宮章子（後一条天皇皇女）は皇太后に上られ、三后並立の例が開かれた。

右の歴史上の事実をふまえて、今上の后を皇太后と称したのであろうから、この「狭衣物語」の成立も、後冷泉天皇以前に溯ることはできないわけである。なお「狭衣物語」の作者は、「六条齋院祿子内親王宣旨」説が有力であるが、この人は源隆国の妻といわれ、この隆国の力添で祿子内親王に出仕したのであろうといわれ、またその隆国は、藤原頼通に最も愛された側近であり、その頼通の女が、三后並立の時の皇后寛子である。

なお、嵯峨帝の後には、この方が皇太后で、狭衣の父堀川大臣と坊門上との間に産れた姫君が中宮で、この方には皇子が産まれていられる。この皇子誕生の際、この方が中宮になられたので、この姫君方の母親が皇太后に上られたのであろうか。

○上の御局 后・女御などが常の局のほか、清涼殿の夜御殿の北の方に賜わる室。その東の方を弘徽殿の上の御局といひ、西の方を藤壺の上の御局という。また源氏物語における桐壺更衣のように、更衣でも賜わることがある。桐壺更衣の場合は後涼殿の一室を賜わった。

○心にくき御あたり 「心にくき御あたり」とは、前記姫君たちのことで、狭衣はかねてこの姫君たちに関心があつたのであろう。「心にくき」とは「心にくく思われるほど物事がすぐれていること」で、こゝでは姫君たちの教養などが非常に高くて、奥ゆかしいのであろうか。

月もとう入りてお前の燈籠の火ども昼のようなるほ影に、かたちはいとど光りまさりて、柱に寄り居て、まめやかに佗ぶ佗ぶ吹き出で給へる笛の音、雲居をひびかし給へるに、帝を始め奉りて、九重の内の賤の男まで聞き驚き涙を落さぬはなし。五月雨の空の物むづがしげなるに、「物や見入れ奉らむ」とまでゆゆしくあはれに誰も御覧するに、「大臣まゐりて見給はば、いかばかり忘々しきまで思さむ」と、我が心地にも驚かせ給ふ。御袖も絞るばかりにならせ給ひぬ。

〔口 訳〕

月もとつくに山の端に沈んで、お前の燈籠の火どもが、昼のように明るい火の光に、狭衣のお顔はかねてよりも一層光りまさって、柱に寄りかゝつていて、心から困った困ったと言いながら吹き出しなざる笛の音は、空までひびかせなざるので、帝を始め申して、宮中のなかで身分の低い男まで聞き驚いて涙を流さぬ者はない。梅雨時の空が何となく気味が悪い様子なので、「笛の音に聞きほれて魔物の類が取りつき申しはしないだろうか」とまで、何か不吉に思われる程深く感動してどなたもご覧になるのに、「父の堀川大臣が参内してこの様子をご覧なされたら、どんなにか不吉な程にもご心配なざることだろう」と、帝はご自身のお心にも驚きあそばされる。そして、感涙に御袖も絞るばかりにならせあそばした。

〔注 記〕

いとゞ 月の光でみていた時もきれいであったが、燈籠の火で見るとなお一層きれいに見えるというのである。

○雲居 その笛の音が天までのぼるほどさえていゝ意で、後に述べられるように天稚御子とその妙なる笛の音を聞きつけて、天へお迎えにくることになるが、もちろん、

「雲居」は宮中の意にもかけてある。

○五月雨 陰歴五月ごろ降り続く長雨で、現代では六月ごろに相当し、いわゆる梅雨のことである。「さ」は元

来「さつき」「さなへ」「さをとめ」などの「さ」と同じで、「田の神・田植え」を表わす接頭語。田植えに必要な雨の意であろうが、その降り方がじめじめと続くので「乱れ」と表現したのであろう。

○ゆゆし 元来は、忌み慎まれる・不吉だの意であるが、転じて、余りにも立派すぎて不吉なことが起りはしないかと思われるほどであるという意にも用いられる。

○御覧するに 唯耳で笛の音を聞くだけでなく、笛の音を中心とした狭衣の姿なども含めた、その全体の様子を見る意であらう。

○見給はば これも前の「御覧する」と同じ用法であらう。

○いまいまし 「忌む」の未然形「いま」を活用させたもので、元来は、はらい清めるべきだ、不吉だ、の意であるが、これも前項の「ゆゆし」と同じく、転じて、余りにも立派過ぎて不吉なことが起りそうだの意にも用いる。

○我が心地 「誰も御覧するに」に対して、「我が心地にも」と続くところである。この「我が」について、岩波書店刊の日本古典文学大系の頭註では「狭衣」としてゐるが、朝日新聞社刊の日本古典全書の頭註のように「帝」とした方がよからう。本人が自分の立派さに驚くととるより、第三者の方がふさわしかろうし、前に「帝を始め奉り」ともあるので、帝の側からの記述のようだし、また「驚かせ給ふ」と二重敬語にもなっているので帝とすべきであらう。









鎌

にわぶわぶ吹き出で給へる笛の音雲居をひびかし給へるに帝××を始め奉りて××××××××××

みながら× ———— の上まで澄みのほ—を上×× ———— さぶらふ人すべて ———— 人×

× ———— の上まで澄みのほ—を内春宮 ———— ××××××すべて ———— へ×××

九 蓮 内 古 鎌

⑧

て×××××××

の男まで聞き驚き××××××××××涙を落さぬはなし五月雨の空の物むつかしげなるに物や見入れ奉××××××××らむと

×××××× ———— ×××××× ———— ×× ———— 聞ゆる物やある ————

九 蓮 内 古 鎌

×× ———— すみのぼるを 欠 × ———— × ———— ××××××××××

⑨

×× ———— きまで× ———— ××おほさる ———— い× ———— ×××××× ———— ×××

古 までゆゆしくあはれに×誰も××御覧ず×るに大臣まるりて見給は××××××ばいかばかり××××××いましましきまで

内 一づ ———— う ———— て ———— 誰も ———— ××× ———— 聞か××××××まひてめづらかに ———— ××

九 蓮 内 古 鎌

一づ ———— う ———— × ———— ×× ———— × ———— し× ———— ×ましか ———— にせきかね××××××××××

古 思さむとわが×心地にもおとろかせ給ふ×御袖も絞るばかりにならせ給ひぬ

鎌 ———— × ———— を ———— ×ら ———— はず ————

内 一は ———— 御 ———— ×× ———— ×ら ———— はず ———— り××××

蓮 給は ———— 御 ———— ×× ———— を ———— ×ら ———— はず ————

九 給は ———— 御 ———— ×× ———— を ———— ×ら ———— はず ————

簡単に説明を加える。

前述の如く、底本の古活字本と鎌倉市図書館本とは、同じく第四系統本であるので、ほとんど全文一致している。

例えば、冒頭の①の部分は、両本とも「中将の御笛」とあるが、内閣文庫本には「中将の御」がなく、蓮空本・九条家本には「御」がない。もっと極端な例は、たとえは④の「聞か限りの」以下の部分は、百字余りの文章が、底本と鎌倉市図書館本とは、ほとんど全文同一であるが、内閣文庫本、蓮空本、九条家本との共通部分はわずかに「なむ大臣」ぐらいで、全く違つた文章となつている。以上の如く、底本と鎌倉市図書館本とは全文全く同文といつてよいが、相違点といへば、②の「いとかく」が「いとかぢ」となつたり、③の「馴らさざりける」が「馴らさせざりける」となつてゐる程度の相違が、約十六箇処あるだけである。

次に、蓮空本と九条家本とは共に第三系統本で、たとえば⑦の如く、底本は「帝」、鎌倉市図書館本も平仮名で「みかど」であり、内閣文庫本では「上」とある部分が、両本では共に「内春宮」となつて共通の本文となつてゐる。ただ相違点としては、わずかに二箇処で、一つは⑨の部分「蓮空本では「ざりしか」となり、九条家本では「ましか」となつており、いま一つは⑧の部分である。⑧の部分では九条家本にヤゝ誤記があるらしく、二十字ばかり前に「上まですみのぼるを」とあるので、その「まで」につられて「男まで」の「まで」からつい「すみのぼるを」と書いてしまつたのではあるまいか。その下に「三、四字分の欠」があつたりして、やゝ混乱してゐるようである。

次に内閣文庫本は、いわゆる第一系統本であつて、たとえは、①の部分で他本は「中将の」があるのにこの本だけがないなど明らかに古活字本・鎌倉市図書館本や蓮空本・九条家本との相違を示している。

なお蓮空本・九条家本は、たとへば①の「中将の」の部分で底本と同じであるように、底本と同文の箇処もあるが、④や⑤の部分のごとく、大きな異同のある部分は内閣文庫本と同文で、蓮空本・九条家本は底本より内閣文庫本により近いようである。

最後に解釈の面から見ると、この部分では、筋の上で影響を与えるほどの大きな異同はないが、④の部分は底本より内閣文庫本、蓮空本・九条家本の方が簡略化されてゐるようであるし、⑤や⑥の部分では逆に底本の方が簡略化されてゐるようである。もっとも、どちらが原本であるかは簡単には言えないことであり、後人の勝手な書きかえであるかも知れないし、又、この本文の異同は後世のものではなく、作者が貴人に所望されるまゝに、同じ内容の作品を幾度も書いて奉る際に生じた異同ではあるまいかといつた意見なども提出されてゐる。

